

育てる所ではない。どんどん回転してほしいからおやくください」って言うんです。何も私達は、専門家になるうと思っ
て集まっているのではないんです。

私達はいま、四〇代が集まっています。

だけどこれは、老後につながるんです。核家族化が進んでるでしょう。同じような年齢層が横に手をつないでないと、それこそ一人一人バラバラで、老人になって一人で暮らさなくちゃならない、寝たきりになっても一人になっちゃう。一人つきりでさびしくなるんです。連帯なんかなくなっちゃうんです。だったら、地区センターを利用しているグループを、奨励してこそあたり前なのに、それを、みんな平等に使いましようと言う。機会均等とか平等の観念が、行政側と市民で違うんじゃないかと思うんです。

相良 私は、一つの地区センターがでるまでに大分かわったので特に感じますが、プールと同じになりますけれど、やっぱり器をつかっただけでしかないんじゃないかと思えます。

プールで、ライセンスを持つてる人ということがありますけれど、地区センターの場合では、いままでは、委託も直営も、館長と事務員のほかは嘱託ですし、昨年ぐらいいからだと思えますが、コミュニティ・ボランティア方式というのはやり始めたんです。コミ・ボラ方式は、

片手間でしかかかわらないんです。

それから、委託の場合ですと、館長にしても、事務員にしても、全然そういうことを知らない人がかかわっているようですね。直営の場合でも、ちよこちよこと異動しますので、地区センターの運営ということが、住民が利用する施設ということが十分わかった方とか、そういうことに意欲を持った方がかかわっていらっしやるだろうかということがあります。直営の地区センターに関していいにしても、少しお年を召した方が館長になるというようなことですね。委託の場合は、やはり定年退職した方が館長になっていらっしやいます。

もっと若くて活動的な人に館長になってもいいと思ってるんですけれど、委託の場合などは、待遇面などでそういう体制になっていないんですね。

委託の場合は、一応運営委員会ができますが、その運営委員会は、自治会長、連合町内会長から、青少年指導員、体育指導委員、民生委員など、各種団体の代表という形になりますけれども、その方たちも、地区センターというものは全然利用したこともない方も多くて。では、その運営委員になるために、行政の方で、地区センターというのはいくらいいのですよって、学習の機会を与えているかという、してないわけです。してな

い方がやりいいんじゃないかなと思えますね。市民局の言うとおりにやっていけばいいということになりますから。

だから、たとえば社会教育係なんかだと、もう少し地区センターとの接点を持つてない現状ですね。市民局と直結になってしまつて。でも、住民にしてみれば、区役所の方が接触が多いわけです。そして、区役所の方が、住民の意向というのはつかんでいるはずですね。けれども社会教育係が余り地区センターにかかわりにくい仕組みになっていて、本庁に勤めていた職員がなると、市民局の言う通りに動いてしまうところがあるのではないかなという感じがします。

そして、コミュニティ・ボランティア方式ですと、隔月の四時間交代という勤務ですから、全然責任の持ちようがない。コミュニティ・ボランティア方式にしても、そこでコミュニティ・ボランティアをやったことで、地域に帰って何か働きかけができるようなことになればいいんですけれど、その研修会もやっていない。

森山 研修会なし？

相良 なしです。やるのは貸し方だけです。貸し方だけ習うから、どうしても、あれをしてはいけません、これをしてはいけません、判ががないと受け付けられ

ません、ということになるわけですね。

地区センターというのはどういうものなのかという基本が、一応地区センター条例などに書いてありますけれど、その基本が本当にわかつて、それを生かそうとしてやっていらっしやるのか、それとも、こういうものをつくりましたから、自然に地域コミュニティは育ちますよ、というふうな考え方でいらっしやるのか。

私は、古い形の社会教育ということ、人民を教化するというような社会教育行政というのはまずいと思うけれども、そうではなくて、本来の意味の社会教育ということで考えて、これは私は、私たちにとってやはり社会教育的な場所なんです。ところが、市民局の方に言わせると、社会教育施設ではないと言うんです。教育委員会に直接つながる社会教育の施設ではなくたって、私たちは、社会教育的な施設なんだから、地域コミュニティを育てる場所として、地区センターがあるならば、それなりの展望がなければいけないのではないかと思うんです。

利用者会と館の姿勢

相良 山内地区センター開設一周年行事をやるときに、地域コミュニティが育つ場所としてあるのだから、そういうもの

を考える行事を一ついれたらと言ったんですけれども、だめなんですね。「予算はありません。あなた方が用意するならば、一周年記念行事のプログラムには入れますけれど、祭当日にはできません。ほかの日にしてください」と言われまして。私達は、四つのグループで話し合いました。お金を少しずつ出し合って、講師を呼んだことがあるのです。

そういうことがきっかけで、利用者のアンケートなどを取りましたら、いろいろなことが出てきました。こういう要望がありますと館側に言って、ようやく利用者の事業として講演会費を取ったんです。ですけど、利用者のメンバーも交代しますでしょ。そうしたら、やっぱり変わりましたね。一年目は、「いま地域で生きるには」ということで講演会をやったんですが、二年目には教養的な色のこい講演会になりました。

地区センターを利用しているグループが、この地区センターをなぜ利用しているのかを考え、地域コミュニティが育つ場所なんだということを考えれば、そこで学んだものを地域に生かせないものではないのか。お料理のグループでしたら、一年に一遍ぐらい、クッキーを焼いて施設を持って行かれないかしらとか、老人給食ができないかしらとか、そういうところへなかなかいかないんですね。地区

センターは「とにかく大勢の人が使ってくださいればいいのですよ」ということではないから、つまり、もとのところにポリシーがないから、利用者の地域への還元という発想にはならないですね。

山内地区センターの場合、大変努力して利用者をつくったけれども、利用者の中でも多くの人々はめんどうなことは避けて通りたいから、「いいわよ、お部屋を借りられれば」という方になってしまふ。

長津田の地区センターができて、一年ちょっとなんですけれど、やっぱり利用者をつくらなければいけないのではないかとということで、コミュニティ・ポラントニアをしている間に、利用者名簿をつくらなりました。利用者をつくるために、グループ分けをしておいたんです。名簿をつくって、館長に「やらないですか、やらないですか」と言ったんです。やはり山内でも利用者があるからつくらなきゃいけないかなあということ、つくろうとしているようなんですけれども、利用者会というのが、どうも成立しそまないですね。

地区センターは「皆さんの施設ですよ」と言うことは、「きれいに使ってください」というのに過ぎなくて、「皆さんが育ててゆく施設ですよ」という部分が抜けていました。皆さんが育ててゆく

施設にするには担当する人の姿勢がすごく大事なので、お年を召した方とか、パートに出るよりカッコいいわというような奥さんが勤めるとしても、それだけの研修会を持ってやってほしい。

たとえば、学校開放の図書室のことでいえるんですけど、横浜市の場合は、貸し方の部分だけしか研修会をやらないですね。教育委員会の婦人リーダー国内研修の報告書で読みましたが、北海道のある自治体では、文庫のことから、親子読書のことから、そういうことを緻密に研修してきて、そうして学校開放するんですよ、かかわる人にそれだけの、行政がそういう研修の機会を二時間与えて開放するというやり方をしていそうですが、時間数は何時間かあったとしても貸し方だけをやって開放するのでは、うんとその生き方が違いますね。

また学校開放の図書室や青少年図書室は、お互いに回転できるようなシステムにすればいいのに、そこだけで終わってまずでしょう？それも全部の本が市の図書館と回転できたら、大変な冊数になると思うのに、同じ図書でも、教育委員会の中では図書館と学校開放の図書室の担当がわかれ、市民局では、青少年図書館と地区センターの図書コーナーの担当も別々、それぞれ全部が縦割で……。

森山 もう担当がごちゃごちゃになっていて、市民がすぐわからないようになっていきます。

相良 だけど、住民は、担当はどこでもいいんですよ。本なら一つのよね。

そういうところで、本当にいい人材を確保するのか、職員の研修をきちんとするか、ではないのか。

運営方法・運営委員

相良 このごろ、地区センターも、施設に金をかけるより運営をしっかりしてほしいのに……。

森山 あんなにお金かけることないですよ。それに駐車しておく、「ここは地区センターの駐車場ではありません。

スポーツセンターです」とか書いた紙をベタベタ張ってね。隣同士なのに地区センターは市民局、スポーツセンターは教育委員会よね。私たちにすれば、同じ市がやっているのに何で違うんだろうと思えますよ。とにかくおかしなと思うのは、管轄の役所をどうやって決めているんだろうと思うのね。ほんとにどうやって決めているんだろうと思って(笑)。私たちに選ばせたいのよね。

相良 少なくとも、地区センターの運営委員なんかは、半分は公募にすればいいんじゃないかと思うの。

東 いいですよええ。

森山 それともなきや、こつちから、本
当によく活動している人を見つけて、頼
んでみればいいんですよ。くじ引きや自
治会長じゃなくてね。

東 募集して、審査して、いかに意欲が
あるかということを見抜いて、そして、
使ってもらったらい。

森山 書くのが下手な人には、テープ一
本しゃべらせて応募させるとか(笑)。

相良 だから、運営委員会だって、地区
センターが開館する一年ぐらい前に、運
営委員会を発足させればいいのに、発足
させませんでしよう。それに建設委員
会があって、運営委員会がそのまま流れ
込む場合もあるし、切っていく場合もあ
りますね。

そういうところで、住民も育っていな
いけれども、育たないようなシステムに
もなっているみたいね。

森山 拠点がありながら、それを有効利
用していない。人でも、お金でもそうい
うことはありませんね。

司会 大徳さんは、地区センターについ
て、研究会をしていましたか。

大徳 利用者の意識調査ということでや
らせていただいたんです。やってみて一
番感じたのは、戸塚センターは直営館、
本郷センターは地域委託館なんですが、
直営館でも委託館でも、利用者の意識と
いうのは全然差がないんですね。だから

地域委託されていても、市でやっている
ような印象で利用している。

地域委託していても、運営委員さんと
いうのは、どこの地区センターでも同じ
ような団体の代表がなっていて、その地
域の特色ある人選がなされていない。結
局運営も決まりきったものになってしま
い、直営と差が出ない。

運営委員さんは、利用団体の方から委
嘱するとか、公募の人に委嘱するとか何
か工夫しないと、本当の意味での地域施
設にならないんじゃないでしょうか。

公民館と地区センター

相良 たとえば他都市の公民館などで
も、運営委員は、運営審議会というのが
地元の人からなるということになってい
るんですね。そうしますと、やはり自治
会長さんとかなんとかで、それが十分機
能していないところもあるようですね。

ただ、公民館の場合は、しっかりした
職員がいるところは大変うまくいってい
るということ、施設が大きくなれば大
きくなるほど、職員が管理的になるので
はないか、管理する側に回るのはない
か。

たとえば国分寺の公民館を見学に行っ
たことがあるんですけども、恋が窪と
いう一番最初にできた公民館は粗末なも
ので会議室だけなんです。ですけれど

も、そこ、一番最近できた本田公民館
というのと比較してみましたら、建物
はりっぱですけど、やはり職員の心がな
くなっていくみたい。建物が大きいと職
員も管理せざるを得なくなるでしょう。
だから建物が大きくない方がいいよう
な気がする。

大徳 そうですね。名古屋でも地区セ
ンターみたいなものがありましたね。運
営委員会があって、それはやはり各種団体
代表なんか委嘱されているのだけれど
も、その下に、実行委員会というような
組織がありましたね。公募のようなもの
だと思いましたが、広報部だとか、総務
部だとか、体育部だとか、いろいろ分
かれています、その部会で、それぞれ行
事を企画したり、会報を出したりしてい
るようなところもあったんですね。

社会教育の意味

佐藤 うちの方で、きっかけづくりでや
るわけですね、コミュニティづくりで
も、学習グループでも。だけれども、い
まの体制ですと、アフターフォローがで
きなくなってしまうんですね。まず、施設
そのものが、もちろんいろいろなむずか
しい条件があつてできないわけですが、
九時では、少なくとも働き盛りの大人の
人が集まって会合できる時間ではないわ
けです。東京とか、そんなところに行っ

ていますし。いま地域の中で、やはりその
人たちに出てきてもらわなければ……。
高齢化社会になると、その人たちが一番
きつところでしょうから。そういう面
では、本当に利用時間を考えていただか
なければいけないだろうと思いますし。

それから、運営委員会が形骸化してし
まうのは、やはり施設が足りないんじや
ないかと思うんですね。地区センターを
つくるのに、区の重要事業で、区民会議
で一年も二年も考えなければならぬとい
うようなんだと、どうしても後ででき
た運営委員会がそのときのメンバーにな
ってしまいますので。もつと身近になれ
ば、「ああ、あの人が一番世話役として
いいんじゃないの」という人になってい
くのではないか。そのときに初めて、そ
こを拠点にした地域活動ができるのでは
ないかと思うんですね。

いまは、区に一人社会教育主事がいま
して、もう一人、それを補佐する指導員
がいます。そういう人が二〇万人の中
に一人いたって、十分に機能できないの
で、少なくとも地区連合に一人、そうい
う人が流動的に動けるような体制で活動
できることが、一番望ましいかなと思っ
ています。

相良 ですから、本当の意味の社会教育
というのを学んでいる人がなっているの
か。ほかの都市の社会教育施設などは、

そういうところはそれなりに、じっくり社会教育というのを肌で学んでいる人がなっている場合が多い。

川崎で地域活動している方は、社会教育の講習を受ける時、受講生の代表として、「いい職員が、社会教育主事の資格を取るための勉強をしたら、どうしてこんなに悪くなるんだらうと思った。だから、どんなことをしているのかそれを見きわめに来た」という挨拶をなすったんですって。

障害児施設で考える

東 私は、市政モニターをやって、本当は十二月に港南の地区センターを見学する予定だったんですが、たまたまかぜを引いて行けなかつたんです。で、最近野毛に地区センターができたのに、いま不勉強を恥じていますけれども(笑)、ぜひ近々行ってまいります。

いまいろいろお話を伺っている中で、「あ、やっぱりね」と思ったのは、かつていた私の娘は障害児で寝たきりの子どもですが、せめて口でもきければと思つて、言語障害児の親の会に入つたのですね。横浜市内に、言語治療教室をぜひつくってほしいという要望を、会として出したんですけれども。これ、横浜市の会だけではなくて、言語障害児を持つ親の会の全国協議会で、お茶の水女子大

の田口恒夫先生とか、共立女子大の言語学の平井昌夫先生などが、何もわからない私たちの先頭に立ってくださつて。というよりは、私たちの後押しをしてくださつて、いまあなたたちが何をどう目標にして運動しなければならぬかを教えてくれました。まだ何にもしてないからこそ、いまが大事で、多分行政側もこのことについてはわからないだらうし、うっかりすればあなたたちの運動次第でまをするぞと言われたのです。

というのは、もう物質社会になりつつある二〇年近く前ですからね。そのときに言われたのは、入物は、まあ代議士先生にでも頼めばすぐに出来るかも知れない。これは代議士先生のお手柄になるわけだから、それよりも、言語治療教室をつくるために、能力のある職員がどれだけ必要かということ、それをまず考えよう。そのためには、その職員の待遇問題も考えようと言われました。

言語障害児というのは、大変に心理的にもむずかしいから、まず四年制の大学を卒業した人が、改めて言語障害児の問題を研究するのだから時間が必要なのです。それで、専門の勉強をするための援助資金と、職員になったときの特別手当と、そういうものを全部、親の私たちが考へて行政側を動かしていこうではないかと。これはもう土台づくりだった

のです。施設は、その後からいいと言われました。

それが結局は、その後に障害児の施設なり何なりいっぱいできたわけですが、ベッドがあいてしまつたり、職員不足で手当も悪いわけです。当時は待遇があまりよくなかつた。そのような問題が後から出てきて、初めてあの先生方がおつしやつたことは、そのまんま国星だったと思います。そのとき私たちには見えなのですが、専門家にはわかつていたわけですね。

そういうことを考えてみても、障害児問題でも、親達にとつて、自分の子どもに障害に関係する問題を取り上げて、要望を出すので、声の大きいところから行政が手をつけ始める傾向がみられます。しかし行政は、総合的な判断を持つてもらいたい。

そうでないと、取り残される問題があるのではないでしょうか。現在では総合的な判断がかなりされてきているように思われます。

私は一九六六年に、障害児を持った親として一人でヨーロッパを歩いて、障害児のための手当の仕方とか、医療や施設を見たり、親達に会ってきました。

そのときに感じたことですが、スウェーデンでは障害者が技能的な訓練をするために、大変にすばらしい職員を派遣し

ているわけです。たとえば、知能の低い蒙古症の人たちがやっている施設があつたんですが、じゅうたんを手織りで織っていました。本当に作品としてすばらしいものにでき上がるのです。そこでは、色彩を指導する人、それから技術的に織り方を指導する人、全部一流の人なんです。なぜそんな知恵の低い人たちに一流の人が必要だらうかと、多分思われる人が多いことでしょう。でも、だからこそ製品がすばらしいわけです。そうすると、世の中へ出たときに、それが一人前に扱われるわけです。そうすると障害者は、生きる喜びがあるわけでしょう。

私はそのときに、日本をはるかに思いながら感じたのは、日本は施設をつくつて、そこに収容すること、収容すれば、弱い人たちのために施してやつたというふうな考え方、そこに、人間が生きるという意味を考えてないような気がしたんです。生きる喜びをどう持たせてやるかという、そこまでの配慮がほしいと思つていました。

地区センターも、利用する人たちが、そこを利用することで起こってくるいろいろな問題、たとえば社会と自分がつながっていくかとか、あるいは、ここで何か一つの技術を身につけるのもいいですが、利用者に対して、施設としての役割をわかつてもらえれば、そこから何

かの糸口が、あるいは地域的な物の発想とか、関心を持ってもらえるのではないか。これは、障害者の施設だけではないに、地区センターでは当然そういう薬効があると思います。

さつきもいろいろな、既存の団体や施設をどういうふうに手当てしていったならば、うまく利用できるだろうかという発言がありました。施設を一から一〇まで行政側がそろえなければならぬという理由はないと思うのです。何かをしようと思っている人たちの気持ちを、どううまく利用していくか、それをどう助けていくかという事で、そんなにお金を使わないでできるのではないかと思えます。

職員の質

相良 先ほどの、働いている人は九時間館では使えないということがありましたが、もう一つ、青少年が集まれないのね。青少年というのは、どんなエネルギーを持っていくかわからないから、あるいは壁に落書きされるかもしれないし、ガチャガチャ騒ぐかもしれない。でも、それにドンとこたえられるような職員がいないから……。

子ども達は包み込んで一緒にやれるだけのエネルギーがないと若者には立ち向かっていけないし。また、若者がそこへ

来られるようでなかったら、その地域は育たないのね。

だから、若者をもう少し温かい目で見なくてはいけなくていいけれど、高校生でも、大人の人が付き添ってなければだめとか、ドアをあけておかなければだめだといひます。よく利用する高校生グループに「何やってるの？」て聞いたら、「紙芝居つくって保育園を回るんです」と言っていました。一年たっても殆んど出来ていないようですが、いろいろな高校の子が集まって何かをしようとしていることは、見守っていくことが大切なのですが、何をやっているかも聞かないで、コミュニティ・ボランティアの人達は「あの子たちは何だかあややつて集まっている、大人の人がいなきやいけない」というのに名目だけよ」とかっているように、なつてしまふわけ。コミュニティ・ボランティアとして何が大切なのかを勉強しないので自分の子どもにも母親の感覚で向けるような感覚でしか、青少年が来ても向けられませぬ。

ということ、私は、地域で青少年対策のいろいろな事業をするより地区センターに勢いのいい男の人が配属される方が、ずっと子どものためり場になれるのではないかなあと思うんです。

東 役所よりも、じかに密着できるところで、対象は人間ですからね、心の問題

でしょう？

相手の心をどうつかむかということの
できる人が必要ですね。

相良 ただお部屋を貸すだけではいんですからね。

東 書類を書くだけでも違うと思うんです。だから、頭がよければいいというものでもないし。地区センターの意味合いもよく考えてもらって、そして、人と人の関係をわかってくれる、そういう人が育ってくれるとよいと思います。

森山 それから七沢のリハビリセンター、あんな大きくお金をかけたのに。プールなんか、ものすごくいいプールになっているんですよ。それを、一年間に二カ月しか使わない。結局、リハビリに温浴とかがいいということはわかっているんですよ。だけれども、余熱利用とくっついてないから、あれだけ大きいプールにお水を入れてたいやると、すごくお金がかかる。かかるから、使わない方が簡単だといつて使わないのね。投資したお金と、これから使っていくお金とのバランスも考えないでつくってしまう。もつたいなくてしょうがないのね。有効利用をもう少し考えてほしいと思うの。

では、何も使わないときはどうなっているかといつたら、ポーンと置いたまま。私は、点字ブロックでも何でも敷きつめて、それを使ったらいいと思うんで

すよ。結局、器はつくるけれども、後は知らんぷりしているという感じ。あれ、もつたいないし、部屋もかなりあいていました。あれはつくったとき余りにも多額の費用を使って大騒ぎされてね。

私は何年目に行ったんだろう、それでびつくりしたんですけれどもね。有効利用のためにどういうことが考えられるかを一回もたたかないで、次から次と物をつくらうとしているんですよ。

確かに大義名分は立つけれど、でも、また七沢の二の舞、どこの二の舞。結局みんな宙に浮いているという形。

相良 たえば長津田という地区センターをつくらうということでは行政の職員と話し合っただんですが、大分わかってきたなと思う人が異動してしまうのね。そうすると、また一から、わからない人とやらなければならぬ。だから、あんまりよんではいけないんでしようが、職員が異動されると、住民の方が玄人という場合が出てきちゃうでしょ。だけれども、メンツにかけてもそちらが玄人なのよね。せつかくこまで来たのになあと思うのに、職員に異動される住民の無念さというのはお感じになったことあるのかしら。

質を保証するには
司会 最後に、これだけは言っておかな

いとも気が済まないと思うことがあ
ると思うので、それぞれ一言ずつでも。

山本 いま施設のお話を聞いていまして
職員の資質という面で、地域の側に立っ
た施設の運営にかかわっていく場合、質
的な意味の見直しはどうしても必要では
ないかなという感じがしています。

利用者の立場で考えれば初めは、皆さ
ん、使いにくさということとどどん言
ってくださると思うんです。それで、行政が
利用者の便宜をはかって使いやすくなる
でしょ。そうすると、もうそこである人
は終わってしまうかもしれないだけ
ども、その先は、施設に行くことと誰々と会
えるから楽しいというように、施設とい
うものに愛着を感じ、自分にとって魅力
ある存在になる段階になって。その次
に、自分たちでこの施設の運営のある部
分、たとえば光熱費が高いとか職員がい
られないとかで時間が夜遅くまでやれな
かったら、その部分を、じゃ、みんな
で会費を出そうとかね。いわゆるある部
分の運営を担っていくような、そういう
話し合いがでてくる段階があると思うの
です。そこら辺に持っていくには、いき
なり運営委員会をつくってやればでき
るというのではないから、かなり質的な
意味での、行政の職員指導とか、あるい
は運営システムというか、そういうダイ
ナミックな発想をもった何かを開発しな

いとむずかしいかなという感じはしてい
るんですが。

ただ、もう一つの面で、今後施設とい
うのが、使っていただければよろしいと
いうことでいった場合に、時代が流れて
いくと、これから企業などでも文化施設
とかいうのがたくさんできると思うん
です。そうすると、たとえばカルチャーセ
ンターかなんかに高い金払うよりは、た
だでできるんだから、そこへ行ってどん
どん使ってしまうということになる。
そうすると、ただ使えればいい自分さえ
使えればいいという、そういう人も意外
とふえてくるのではないか思うんです。

そうなると、たとえば僕なんか、いま
やっていて非常に苦労していますが、障
害者の地域活動ホームをつくらうとい
うことで地元に入ると。そうすると、
地元の人は、「あれは私たちが使えるも
のじゃないから要りません」と、こうや
るわけ。もう一年以上かかって全然つく
れないわけ。やはりそういうところによ
つかってしまっているんですよ。

だから行政のつくる施設を考えると
でも、いわゆる民間かなんかの施設と違
う、いわゆるビジョンをもって、そうい
うものを目指していかないと、行政の施
設に対するイメージというものが、非常
に利己的に考えられていくのではない
か。逆に、つくりたい、困った人のため

の施設というのは、なかなかつくりにく
くなっていくのではないかという感じが
するんですよ。ある意味では連帯感が
そんなにないというそんな感じがしてい
ます。

もう一つ、われわれ行政の地域への入
り方といいますか、先ほどの質の問題と
いうことでもあるんですが、どうしても
縦割りなんです。だから、こちらを何
とかしない。たとえばうちの係でやっ
ている係員は、老人クラブだったら老人
クラブしかやらない。それから、赤十字
なら赤十字だけ。共同募金なら、共同募
金。一応全地区やっていますが、ある地
区の共同募金は全部のことがわかるけ
れども、老人クラブのことはわからないわ
け。

だから、それを少し整理して、たとえ
ばうちは地域福祉係なんだから、六人い
れば六人を地域六つに分けて、地域担当
制というふうにしたらどうかと考えてい
るんです。これは福祉の専門職の領域で
は、福祉のケースワーカーというのが地
域担当制をやっていますのでね。地域に
関係する職員はみんな地域担当にし
て、その地域に関する地域福祉の情報は
全部知っているという。そういうところ
でやらないと、ちょっとまずいのではな
いか。

各係ごとで、地域福祉の担当はその地

域のことはよくわかっている人がいて、
社会教育の人もやはり地域を持ってい
て、その社会教育のことは全部わか
っている、地域振興の人はやはり全部わ
かっている。そういう人が集まって、月
一回ぐらい、この地域はいまどうい
うところが問題があってということをお話せば、
かなりわかると思うのね。

佐藤 うちの方でもたとえば町内会に頼
みまして、ああ、うちに関係ないと思
っていると、うちの関係がわりとありま
す。青少年指導員とか、子供会の人と
か、婦人部の人が出てくると。

区役所の中、社会教育は関係局が三つ
ぐらいですが、課にすれば七つ八つあり
ますね。少なくとも、その中だけはみん
なだれでもわかるようにしているのでやっ
ていまして、もうわからないんですよ。

そういうところも、町の人になれば、
もうみんな同じですからね。市民課の職
員であろうと、税務の職員であろうと、
みんな同じだと思いますので。その辺、
個々の職員の資質の向上を、研修とかそ
ういうもので図っていくのはもちろんな
んですが、広い視野のことまで知ること
ができるようなそういうシステムづくり
が必要だろうと感じていました。

大徳 きょう皆さんのお話を聞いてい
て、行政に対するおしかりをいろいろ受

けたんですが、私なども、いろいろな仕事をやっていて、自分の仕事が地域連帯に対してプラスになっているのかどうか、私自身も疑問に思っている面もあります。

以前、ある大学教授が書いていたんですが、農村には農村の暦があるというんです。要するに、朝五時か六時ぐらいに起きて、いろいろな作業をして、夜は夜で早く寝てしまふみたい。そうすると、それに携わる農政の職員というのは、朝九時に出勤していたんでは間に合わないというんです。

都会でも同じように、皆さんには皆さんの生活の暦があるだろうけれども、役所というのはそうじゃないんですね、役所の暦で動いてしまうわけです。組織の論理というか、いろいろな役所の行動原理があって、どうしても生活の行動原理とはぶつかってしまう面があって。その辺が、どうにかならないのか。役所というの、もっと皆さんの生活の行動原理と一緒に考えていくような形にならないと、市民自治というのは育っていかないんじゃないかなという事はつくづく感じていますね。

しかし、もう一つ、きょう皆さんのお話を聞いていて、地域の中でも非常に連絡が悪いということですね。ですから、結局、地域の中でも縦割りになって

しまっているのかなあ。役所が縦割りだというのはある意味ではやむをえない面もあるけれど、地域でも連帯みたいなものが失われているのかなあ、この辺はやはり皆さんにちょっと努力してもらわないと(笑)、これはもうしょうがないんじゃないかなあ、という気がしたんです。

相良 本当にそう思いますよ。けれど地域連帯は、ばらばらで個人でとてもやりおせない部分と私たちの個人の努力でできる部分と、それからシステムとしてやればできる部分とあると思うのね。そういう部分で、行政の方でも地域を育てるということをやる場合に、地域が育つということはどういうことなのかというの、もちろんと踏まえてやるかやらないかということ、地域が大きく育つか育たないかものになるのではないかと思う。

だから、地区センターでも、障害者施設でも、ともかくどういふふうにそれが地域にかかわっているかということ、絶えずその視点を持って運営していくか、いかないかではないか。私がしつこく地区センターのことを言うのは、一番地域の連帯を育てる場所であるはずだし、だから、それは一番やりいい場所なのか、なぜ行政が育てる働きかけをしないのか。だから私は、地区センターにこだ

わり続けているんですけれどもね。

だけど、それはお役所の責任ばかりではなくて、私たちの中にも、先ほどの共同募金でも金額を決めてほしいのね。それから、「めんどくさいことはいやなのよ」と言う人がいっぱいいるわけ。いっぱいいる中で、ものすごく努力している人もいます。けれども、個人の努力というのは限りがあるわけ。個人の努力で、本当に一人でへとへとになるよりも、ここに行政の仕組みがもうちょっとうまくいっていたら、もう少しまくいくのではないかという部分があるのよね。そういうことで、行政に対しても厳しいことを言うんだろうと思うんですけれどもね。

子ども、親にとつてのふるさと

東 私、ひとつお願いしたいのは、うちは団地ですからことにそうだし、また、新しい住宅地はたぶんそうだと思うんですが、横浜のような都市に住んで感じるの、親たちは、お休みになると、自分の生まれ育ったふるさとへと、あたかもそこが子ども達のふるさとでもあるかのように帰ってしまうのです。でも、私は、近所の人に「お子さんのふるさは横浜ですよ」といつも言うのです。これを、一度行政側から、子どものふるさと、あなたのふるさととはここでですよとい

うPRをしてほしいのです。そうしないと、連帯感は絶対生まれなと思います。相良 私は、みんなに笑われるんだけど、「子どものためのふるさとって言うけど、それ、私たちのためのものなのよ」と言うんです。だって、子どもが大きくなったら、みんな親から離れていくのね。老人ばかりがそこに残るわけ。そうすると、私たちの最後の生活のためにも地域が大切なのね……。

学校教育に水泳の専門家を

森山 私は、学校教育の中に、水泳の資格を持っている人が入っていけない矛盾を感じてるんです。というのは、いまは小学校の先生が教員テストを受けるときに、二五メートル泳げることが最低条件みたいになっていますが、泳げれば教えられるというものじゃないということ。

それで、一学年一遍に、二五メートルの一面のプールに、四クラスあると、三クラスあると、ぱっと入れるんですね。あの現状を見ると、水泳だけがしない方がめっけものだと思ってるんです。それで、私の学校はうまくいっているんですよ、幸いに。それは体育の關係の先生がいいからね。

けれども、学校ごとの格差はひどいわけですよ。それを見ると、海老名市はちゃ

んと、水泳協会から委託されて、その学校の近所の、ライセンスを持った専門家が入っていかれているんですよ。横浜市は入っていかれないんです。そのかわり、強化訓練と称する、夏休みにはお手伝いできるところまでは取っていますけれどもね。だけど、それが残念ではない。

事は人命につながるんだから、先生がTシャツを着て、ジャンジャカジャンジャカやっているだけでは、だめなんです。

学校教育に、水泳の専門家が入っていかれる門戸を開けということ、私は言いたいです。どこに言っていないかわからないから、ここで言っておけばだれかが何とかしてくれるのではないかと思うんですが、もっと有効に人材を使ってほしい。

それから、遠くから持ってくるな。人材は近くから持ってこい(笑)。交通費も払わないで済むから。それで、子どもたちの顔も知っています。そういうところ

で子どもたちが育つのが地域ではないかと思うんですよ。だから、いくら優秀でも遠くから何時間もかけて来る先生を待つとか、そういうことじゃないということを言いたい。

私は、学校開放というのは、施設ばかりじゃないと思うんですよ。人材の開放ということにまで、どうして行政が打ち出さないかなと思います。盲点ですよ。逆に、学校開放、施設を開放したから、何年間実践してきたからこそ、人へも、

人力を使うという方の開放にも、一つ、もう反省として出ているのではないかな。

だから、逆に言うと、行政は物をつくったら、動かしたらば、あるとき必ず反省事項をやってくれということですよ。改善してくれ、改善もしないうちに次の施設をつくるな。それが言いたいですね(笑)。

東：本当ですね。

司会：今日は、長時間有難うございました。